

談話における日本語の人称情報

アルカディウシュ・ヤブウォインスキ

日本語の人称についての情報が日本語学習者に多大の困難をもたらすものであることは、たびたび指摘されています。語彙の点からは大半の日本語の文がさしたる問題なしに理解されるにもかかわらず、その文がだれについてのものであるか明白でない場合がしばしばあります。たとえば日常会話から採集された次の文：

じゃ、今日ね、鹿島へ行って、夜からね、サッカーの試合でも見てもいいかな、と思ったんですよ。

この文の語彙的意味は明瞭であっても、文脈が提示されないかぎりその発信者・受信者の人称についての情報は十分ではありません。ついでに申し添えておこならば、本稿の終末部分では、再び、テキストの一部分としてのこの同じ文に立ち戻るでしょう。さて、外国人学習者の発信する日本語文が一特に話し手・話し相手にかかわる場合—しばしば人称名詞過剰という現象を起こすこともよく知られています。もちろん、こうした困難や誤りは学習の一定段階をすぎれば自然に消滅するものである、という議論も可能でしょう。しかし、部分的にでもその原因を説明できるものならば、そうした試みは当然なされてしかるべきであると考えます。

一般的な文の人称情報は特定の図式に従いながら一つ一つの述語に記載されるものである、と仮定することができます。すなわち、すべての述語は人称情報によって満たされるべき「隙間」(アメリカの情報学者 Minsky の用語を用いるならば terminal)を持っているのだ、と。言語情報は次の三つのレベルに分類することが可能です。

- 第一のレベル : 辞書の語義。時制や人称に囚われない普遍的な意味。
- 第二のレベル : 状況の文脈と密接に結び付いている情報、つまり、「情報ターミナル」という隙間を満たす情報。逆に言えば、すべてのターミナルは特定の情報のみを受け入れることができます。
- 第三のレベル : 文脈の具体的現実。

第一レベルの意味は人称情報を含むことができないという理由により、第二レベルに属する述語からは常に人称情報が解読される、と推定されます。とはいえ、先程の例からも明らかなように、単独の文だけが与えられた場合には必ずしもそこから人称情報が読み取れる訳ではありません。

人称情報によって満たされるべきターミナルの数は動詞によって様々です。たとえば日本語の動詞「読む」は二つのターミナルを持ちます。

AがBを読む。

それに対し「紹介する」は三つです。

AがBをCに紹介する。

紙数の限られた本稿では便宜的に今の二例でAとして表示されたターミナル、文の主語に当たるものだけを考察します。もちろん、人称情報は文の主語によってのみ伝達されるわけではありません。たとえば、日本語の敬語などでは主語が不在でも間違いなく人称を特定することができます。また、「あげる」「くれる」といった動作の方向性の明白な動詞に主語を付け加えることが人称情報の過剰を引き起こす可能性があります。

日本語だけに限らず、すべての言語において常に主語が表面化している訳ではありません。例えば命令形の場合が、そうです。問題とされるべきはむしろ、多くの言語(たとえばポーランド語や英語)が一つ一つの述語に対し人称情報の書き込みを義務的に要求するという事実でしょう。英語の場合は主語が personal pronoun として、ポーランド語の場合は動詞の人称語尾として登場するのが決まりです。といて、主語が省略される傾向の強い日本語が世界言語の中で際立って特殊だと主張することにもたいした意味はないでしょう。つまり、文の段階においてのみ日本語の人称情報の特徴を追求するならば、それは主語の有無というあまり生産的でない結論にたどりつかざるをえないので、以下においてはテキスト段階に議論をしぼることにしましょう。

アメリカの言語学者Hindsによれば、テキストは段落に、段落はさらに個々の文に分けることができます。彼はまた、レジスター (register) とその要素としてのコンセプト (concept) という用語を提唱しています。コンセプトは、話し手が社会活動を行うための基本的情報の単位であり、レジスターは、それと関連する情報を記載した辞書と、定義することができます。レジスターに正確に導入されたコンセプトは、現実には、

省略化 (deletion) ・ 定義化 (definition) ・ 代名詞化 (pronominalization) ・ 主題化 (topicalization)

という4つの過程のどれか一つを通過します。これらの過程を一つ一つ例によって、説明しましょう。

省略化：吾輩は猫である。名前はまだない。

第一の文で導入されたコンセプト(吾輩)は、第二の文では省略化されています。この過程について、次の3つの注釈を加えておく必要があるでしょう。第一に、コンセプトは必ずしもそれが導入された直後に省略化されるとは決まっていない、ということです。逆に言えば、直前の文からいつもコンセプトを察知することができるとは限らない、ということ。また省略化されるのは、ほとんどの場合、最後に導入された、最も新しいコンセプトです。第二に、コンセプトが省略化され得るケースでは、話し手・聞き手の相互理解が存在しなくてはならない、ということです。とすれば、現実として、無限に長い文にコンセプトがまったく省略されている、という事例も可能だ、ということになります。第三に、談話の主題が「自ずと明らかになる」場合でもコンセプトが省略化されます。つまり、例えば、仮に談話冒頭の文であるならば、情報の表面に人称のコンセプトが含まれていなくても、それは必ず話し手の行為を指示するでしょう。

定義化：田中って知ってる？その人はもうすぐ奨学金を取って、アメリカに行くつもりだ。

この例ではコンセプト(田中)は省略され、代わりに定義が導入されています。聞き手はこの「定義」を、文脈の枠内で極めて一義的に理解します。

代名詞化：田中のことは、あまり好きじゃないよ。彼は頭がいいけど、人に対する態度はどうもおかしいよ。

これは、既に導入されているコンセプトが代名詞の形で登場してくるすべての場合を指します。

省略化・定義化・代名詞化という3つのほかに、一度現れたコンセプトが同じ形で繰り返される場合も、存在します。しかしそうした場合は、ごく限られています。別のアメリカの言語学者 Grice の用語を借りるコミュニケーション原則、つまり話し手間の情報交換を規制する原則の一つによるならば、「発言に含まれる情報量を、(その場の情報交換にとって)適当である範囲において最大に豊かにせよ。必然以上の情報を伝えようとするな。」これは、日本語を外国語として学ぶ学生が直面しなければならない状況を、正確に言い当てています。コンセプトが主題として現れるのは、それなしでは発言が理解不可能になるようなケースに限られています。

ところで Hinds によると、レジスターは、恒常的レヴェルと一時的レヴェルの二つで機能します。恒常的レヴェルには、最初に文に導入された際に補助的説明なしで理解され得るコンセプトが内に含まれます。例えば、日本語を用いる者のすべてにとって、次のようなコンセプトは初めて文に導入されたとしても、何を指すかが了解されるでしょう。

私、あなた、月、日本、太陽など

恒常的レヴェルの内容は、言語使用者個々の性格や言語外の諸現象の影響を被る場合があります。例として、1995年5月17日付け「朝日新聞」の見出しの文

「麻原今朝逮捕」

では、「麻原」というコンセプトが「オウム真理教」教祖を指示するということは、すべての新聞読者にいささかの困難もなく理解されるはずで

す。一時的レヴェルのレジスターには、最後に導入されたコンセプトに関連する情報が含まれます。そうした情報は該当するコンセプトが有効である限りにおいて有効であり、コンセプトが消滅すると同時にレジスターから消し去られます。例えば、「車」というコンセプトが導入されると、それは一時的レヴェルのレジスターに「ライト」「エンジン」「ブレーキ」といったコンセプトが現れてくることとなります。コンセプトは、文に現れると同時に理解されるでしょう。

先週、ドイツ製のすごい車買ったけど、エンジンは日本製だったよ。

日本の言語学者久野暉によると、日本語の談話を問題にする際に、コンセプト(久野の用語では主題)の省略を考慮せずにはいられません。久野の形式化した省略の原則では、省略された文の全要素は言語構造または言語外の文脈に基づいて復元可能でなくてはなりません。

久野はまた、視点の統一性の概念もまた提唱しています。すなわち、主題の視点が語り手の視点と同一あるいは極めて接近している場合、主題の省略が可能だ、というのです。そういう理由で、次の第一例では、主題・花子の視点が話し手の視点と同一のもと考えられるので、主題は省くことができます。一方、第二例では、主題の話し手の視点が異なっているため、そ

れは不可能です。

太郎が花子を家まで送ってくれた。(花子は) 家に上がってお茶でも飲んでからお帰りになったら、と誘った。

* 太郎が花子を家まで送って行った。(花子は) 家に上がってお茶でも飲んでからお帰りになったら、と誘った。

本稿の最後の部分では、以下の事例のなかでこれまでに解説してきた法則性を適応してみたい、と思います。テキストは、著者が録音したアマチュア無線会話を文字化したものです。紙数の限られた本稿では本例を詳細に分析するのはできませんが、少なくとも、分析に値する問題の所在を示し、その方法論を提示してみます。

このテキストに含まれる一つ一つの述語の主語の人称に関する情報の在・不在を分析してみましょう。以下の例では、人称情報が読み取られなければならないすべての箇所に、人称情報が登場している場合は人称コンセプトの脇に、登場していない場合は述語の脇に、番号が付けられています。この資料にはまた、テキスト内の全部の述語に関する人称情報の有り様を分析した結果を表の形で付け加えてあります。表の枠は順に、述語番号・具体的述語・人称情報の形を示します。人称情報が導入されている場合には {I}、省略されている場合には {0} の記号が与えられています。

テキスト中の天気や時間に関する文の人称情報は、省略されたものとして、分析しませんでした。また人称コンセプトをなすのが特定の現象の記述である場合には、記述を両側から点々で挟んでそのまま引用してあります。

それでは、次の分析資料の一部をごらんください。

テキスト

A-1:

{1} 7K3XUV, {2} 7N2NHA. あ、今日は、 {3} 日本武道館サイド、 {4} 秋葉原向け、
{5} どうぞ。

B-1:

{1} 了解しました。 {2} 7N2NHA, {3} こちら 7K3XUV です。 {4} 了解いたしました。
{5} 秋葉原向け {6} 了解いたしました。なんか {7} メインなところがね、弱くて {8} 気がつかないんですけども。はい、ええ、こっち {9} 向かってきてのかな、 {10} そうだと。まあ、 {11} 原着まじかな、と {12} 思いますけれども、安全運転で {13} ご走歩ください。 {14} 7N2NHA, {15} こちら 7K3XUV です、 {16} どうぞ。

A-2:

{1} 了解。はい、 {2} 7K3XUV, {3} 7N2NHA です。そうだ、今日ずっと朝から横須賀へ
{4} 行って、さっき2時ごろからいったんお家に {5} 帰ってね。 {6} 3時間ぐらい時間が空いてたんで、と {7} 思って、家に {8} いたらちょうど、あの、 {9} 携帯がペロペロペロと鳴ってたんでね、 {10} なんだいな、と {11} 思ってね。あまり {12} 土日に鳴ること {13} 少

ないんだけど、〔14〕鳴ったらね、あの、〔15〕ショップから電話で、〔16〕なんかいいもん入りましたよって〔17〕いうんでね。それで、ちよつくらね、ちよつくらつうわりには今銀行へ〔18〕行ってお金を〔19〕降ろして行くんだけど、はい、あの、そうなんです、はい。うちのローカル方面で、なんかね〔20〕バーベキュー大会がどうのこうのっていうんだけど、

〔21〕私ね、どうも自分も含んで三人以上のああいうものは苦手なんだけど、さっき〔22〕横脇通ってたら、〔23〕えらい〔24〕いきおいもんでね、おいおい〔25〕嘘だろうと〔26〕思ってそのまま〔27〕かすめてこっちへ〔28〕きっちゃいました。はい、そうなんです。〔29〕雨も降ってきましたんでね。今日、夕方夜〔30〕仕事で、明日は茨城、水戸か鹿島へ〔31〕行きます。今、あれ、〔32〕このやろう、おつかねな、〔33〕タックシだと〔34〕思ってるね、本当に、もう。じゃ、今日ね、鹿島へ〔35〕行って、夜からね、サッカーの試合でも〔36〕見てもいいかな、と〔37〕思ったんですよ。じゃ、〔38〕雨も降りそうなんだね。仕事も横須賀〔39〕かたづけなきゃいけないと〔40〕思って、横須賀〔41〕行きましたね。でも今からあれだね、仕事を〔42〕ほっとらかして鹿島へ〔43〕行っても〔44〕間に合うかな。〔45〕7K3XUV、〔46〕7N2NHA、〔47〕神保町、〔48〕どうぞ。

B-2:

〔1〕了解しました。〔2〕7N2NHA モビル、〔3〕こちらは7K3XUVです。ええ、ですね、まあ、このごろはサッカーっていうものに関して〔4〕興味ありませんのでね。まあ、会社とか学校を〔5〕休んでまで〔6〕見に行こうと思わないんですけれども。はい、〔7〕山崎さん仕事を真面目でね、話し〔8〕聞いたら今までやってみたいですよけれどもね。仕事〔9〕サボってサッカーを〔10〕見に行くようじゃ〔11〕おしまいですよ、なんで〔12〕言っていますけれども、本当に。そう、あれ、今日は八王子の方へ〔13〕行くって〔14〕言っていたんですけどね。あれ、そこらへんあまり〔15〕記憶が正しくないかもしれませんけれども。〔16〕ぼくの方はあいかわらず午前中午後帰ってきたの、〔17〕3時ぐらいだったかな。3時ぐらいまでずっと〔18〕出かけてましてね、ようやく落ち着いた気分が無線に〔19〕取り組もうという、そんな〔20〕感じです。や、〔21〕山崎さん本当に、あれ今、今〔22〕日土曜日ですよ、確か、あ、〔23〕土曜日、あ、〔24〕土曜日ですね。〔25〕土曜日だというのに仕事しててね、本当に〔26〕ご苦労様ですね。〔27〕携帯電話鳴ったということですね、や、本当にね、家で〔28〕くつろいでいと〔29〕思いますけれどもね。もう、そういう時は携帯電話の、あれ、〔30〕スイッチってあるのかな、〔31〕スイッチがあれば〔32〕切っておけばいいんじゃないでしょうかね。〔33〕7N2NHA、〔34〕こちら7K3XUVです、〔35〕どうぞ。

(以下省略)

人称情報表

A-1

番号	述語	人称情報
1.	{0} {聞こえていますか}	{I} 7K3XUV
2.	7N2NHA です	{I} 7N2NHA
3.	{0} 日本武道館サイド {にいます}	{0}
4.	{0} 秋葉原向け {です}	{0}
5.	{0} {話してください}	{0}

B-1

1.	了解しました	{0!}
2.	{0} {聞こえていますか}	{I} 7N2NHA
3.	7K3XUVです	{I} こちら
4.	了解いたしました	{0}
5.	秋葉原向け {だ}	{0}
6.	了解いたしました	{0}
7.	弱くて	{I} メインなところ
8.	気がつかなかった	{0}
9.	向かってきて	{0}
10.	そうだ	...メインなところが弱くて...
11.	原着まじかな	{0}
12.	思います	{0}
13.	ご走歩ください	{0}
14.	{0} {聞こえていますか}	{I} 7N2NHA
15.	7K3XUVです	{I} こちら
16.	{0} {話してください}	{0}

A-2

1.	了解 {しました}	{0!}
2.	{0} {聞こえていますか}	{I} 7K3XUV
3.	7N2NHAです	{I} こちら
4.	行って	{0}
5.	帰って	{0}
6.	3時間ぐらい時間が空いてた	{0}

7.	思って	{0}
8.	いたら	{0}
9.	鳴った	{I}携帯
10.	なんだいな	...携帯がペロペロとなった...
11.	思って	{0}
12.	鳴る	{0}
13.	少ない	...土日になること...
14.	鳴ったら	{0}
15.	電話で	{0}
16.	入りましたよ	{I}なんかいいもん
17.	入りましたよって言うんで	{0}
18.	行って	{0}
19.	降ろして行く	{0}
20.	{ある}	{I}バーベキュー大会
21.	苦手だ	{I}私
22.	横脇通ってたら	{0}
23.	えらい	{0}
24.	いきおい	{0}
25.	嘘だろう	{0}
26.	思って	{0}
27.	かすめて	{0}
28.	きちやいました	{0}
29.	降ってきました	{I}雨
30.	夕方仕事で	{0}
31.	行きます	{0}
32.	おっかねな	{I}このやろう
33.	タックシだ	{0}
34.	思ってる	{0}
35.	行って	{0}
36.	見て	{0}
37.	思った	{0}
38.	降りそうだ	{I}雨
39.	かたづけなきゃいけない	{0}
40.	思って	{0}
41.	行きました	{0}

42.	ほっとらかして	{0}
43.	行っても	{0}
44.	間に合う	{0}
45.	{0} {聞こえていますか}	{I} 7K3XUV
46.	7N2NHA {です}	{I} 7N2NHA
47.	神保町 {にいます}	{0}
48.	どうぞ {話してください}	{0}

B-2

1.	了解しました	{0!}
2.	{0} {聞こえていますか}	{I} 7N2NHA
3.	7K3XUVです	{I} こちらは
4.	興味ありません	{0}
5.	休んで	{0}
6.	見に行こうと思わない	{0}
7.	仕事を... やってた	{I} 山崎さん
8.	聞いたら	{0}
9.	サボって	{0}
10.	行く	{0}
11.	おしまいです	...見に行くようじゃ...
12.	言っています	{0}
13.	行く	{0}
14.	言った	{0}
15.	記憶が正しくない	{0}
16.	帰ってきた	{I} ぼくの方
17.	3時ぐらいだった	{0}
18.	出かけてまして	{0}
19.	取り組もう	{0}
20.	そんな感じです	{0}
21.	仕事してて	{I} 山崎さん
22.	土曜日です	{0}
23.	土曜日 {です}	{0}
24.	土曜日です	{0}
25.	土曜日だというのに	{0}
26.	ご苦労様です	{0}
27.	鳴った	{I} 携帯電話

28.	くつろいで	{0}
29.	思います	{0}
30.	スイッチってあるのかな	{I}携帯電話
31.	スイッチがあれば	{0}
32.	切っておけば	{0}
33.	{0} {聞こえていますか}	{I}7N2NHA
34.	7K3XUVです	{I}こちら
35.	どうぞ {話してください}	{0}

このテキストの統計的分析の結果は、際立って特徴的なものとなりました。すなわち、テキスト中の個々の述語の人称情報を分析した結果、約70パーセントの述語についてその情報が省略されているのです。特に一人称についての情報が省かれる率は、80パーセントを越える高さを示しています(いわゆる「自ずと明らかになる情報」)。さらに単文のレベルに現れる人称情報(例えば、主語・モダリティ・敬語)は、このような長いテキストではほとんど重要な役割を演じていません。なぜならこうした情報が欠如していたとしても、テキストの全体から人称について知ることは十分可能だからです。残念ながらここで人称情報の省略に関するより大規模な分析を行う余裕はありませんが、例示したテキストとその分析だけの有り様からでも、人称情報が最大限省かれる傾向のある日本語を学ぶ外国人学生が、日頃直面している困難を察していただくことはできるでしょう。と言うのも、最初に述べましたように、英語やポーランド語などの言語では人称情報が文のレベルで表面化されなければならないからなのです。

もつとも以上述べてきた原則は、何よりも談話テキストにあてはまるものでしょう。また例としたテキストが分析の素材として特殊なものであることも認めなくてはならないでしょうが、それでもこれが生きた「談話」の記録であることに疑問の余地はないはずです。より公式的なスタイルを持つ書かれたテキストでは、省略もよりまれにしか発生しません。瞬間的に生まれ消えてゆく談話の分析は容易ではありませんが、それが談話を言語学的分析の対象から除外していい理由にはならないでしょう。私達の到達した結論は、そうした分析の必要性を証明しているはずです。

参考文献

- Grice, John. 1975 *Logic and Conversation*, in (eds.) Cole, Morgan. *Syntax and Semantics: "Speech Acts"*, New York Academic Press.
- Hinds, John. 1976. *Aspects of Japanese Discourse Structure*. Tokyo: Kaitakusha.
- Kuno Susumu. 久野 章 1978. 『談話の文法』 Tokyo: Taishukan.
- Minsky, M. 1975. A framework for representing knowledge. *The Psychology of Computer Vision*, ed. by P. Winston, New York, McGraw-Hill.